

The Journal
of
Flannery O'Connor

✦フラナリー・オコナー研究✦

第2号

日本フラナリー・オコナー協会

September, 2020

ISSN 2188-9716

目 次

【巻 頭 言】

『フラナリー・オコナー研究』第2号発行にあたって	4
会長 野口 肇	

【論 文】

オコナーの作品構築にみるカトリック・アイデンティティ	
亀田政則	6
会 則	24
投稿・執筆規定	26
活 動 報 告	27
編 集 後 記	30
執 筆 者 紹 介	31

『フラナリー・オコナー研究』第2号発刊にあたって

日本フラナリー・オコナー協会会長

野口 肇

誠に残念ながら、この度の新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、本年3月に予定をしておりました日本フラナリー・オコナー協会第7回大会、及び総会を開催することが出来ませんでした。未だ状況は予断を許しませんが、一日も早く、事態が収束されることを祈ってやみません。

さて、この度、当協会の機関誌『フラナリー・オコナー研究』第2号が発刊されることになりました。掲載論文は1本ですが、今後、応募者が増えてくれることを願っています。

ところで、先年、ある書店で曾野綾子の『人間の分際』をたまたま手にしました。そして、偶然開いた頁に、「しかし私は、神という概念がないと人間という分際を逸脱する気がする」¹という一文がありました。この一文を読んだ時、筆者は、フラナリー・オコナーの「地獄がなければ、人は獣のようになるだろう。地獄がなければ、尊厳もない。神の慈悲を忘れないように」²という言葉の思い浮かべました。キリスト教信仰に生きた二人の作家のその言葉に共通するものは、目に見えない大きな存在を常に意識すること、と同時に、その見えない存在を感じる事の大切さだと思います。言い換えれば、曾野綾子もオコナーも、神の支配する中世から抜け出した人間の、何でも出来るという、際限なく傲慢になっていく状況に警鐘を鳴らしているとも言えます。つまり、「世俗的な考え方にますます支配される度合いを強めているこの世界」³で、我々には、目に見えない存在を感じる謙虚さが必要だということです。「シモーヌ・ベイーユは我々を謙遜へと止めておく神秘の体現者で、私には、何よりもそうした神秘が必要だ」⁴とも述べるオコナーの言葉を、もう一度噛みしめてみたいと思います。そして、忙しい日々の生活においても、時には、人知を超えたその向こうにある「生の神秘」⁵に、思いを馳せる余裕を持ちたいものです。

ここまで書いて、筆者は子供の頃、両親や周囲の人が時たま口にしていた「お天道様は何でも知っている」という言葉を思い出しました。その意味は、「誰が見ていなくても、悪いことをしてはいけない」、と教わりました。この言葉は、現在では死語とまでとは言わないまでも、滅多に聞かれなくなってしまいました。説明するまでもありませんが、「お天道様」がそのまま太陽を意味することもあります。神や仏の象徴として用いられることもあります。世界史的な新型コロナウイルスの厄災のなか、時には空を見上げてみたいものです。

いささか旧聞に属しますが、事務局の体制が一新されました。事務局長に久保尚美氏が、事務局幹事に関根金太郎氏が、それぞれ就任いたしました。また、当協会のホームページも一新されました。これを機に、新たな一歩を踏み出して行きたいと思います。是非、会員諸子のご協力をお願いいたします。

2020年9月

¹ 曾野綾子『人間の分際』幻冬舎新書 [383] (幻冬舎、2015)、33頁。

² Fitzgerald, Sally. ed. *The Habit of Being*. (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1979), 354.

³ Fitzgerald, Sally and Robert Fitzgerald. eds *Mystery and Manners*. (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1979), 185.

⁴ Fitzgerald, Sally. ed. *The Habit of Being*. 189.

⁵ Fitzgerald, Sally and Robert Fitzgerald. eds. *Mystery and Manners*. 98.

【論文】

亀田政則

オコナーの作品構築にみるカトリック・アイデンティティ¹

1.0 問い

フラナリー・オコナー (1925-1964) は、自らの作品構築において、アナゴジカル・ヴィジョン(anagogical vision) をどのようなしかたで援用しているのだろうか？ここでは、この問いをとおして、オコナーの作品世界が自身のカトリック・アイデンティティの反映であることを明らかにしたい。

2.0 アナゴジカル・ヴィジョンとアナログア

アナゴジカル・ヴィジョンは、(1)「信仰のうちになされる聖書釈義」(an exegesis in faith²)、すなわち「聖書にある物事や出来事についての霊的に高められた理解のしかた」(a spiritually elevated way of understanding things or events in Scripture³)にその基礎を置く。そしてその上に立って、(2)われわれが「現実」と呼び棲み慣れている世界のなかで惹起する出来事を「永遠の観点から見ること」を意味する。⁴ このヴィジョンは、その特質からして *theologia mystica* との関連において言及されるものの、カトリックの信仰世界に生きる誰もが — つまり、とりわけオコナーに限ったことではない⁵ — 共有しているヴィジョンであると言ってよい。

一方、アナログア (analogia) はアナゴジカル・ヴィジョンを現実的に可能にし、「見えるもの」から「見えないもの」への架橋を築く役割を担っている。アナゴジカル・ヴィジョンは、それゆえ、アナログアを前提とし、かつそれに基礎づけられているといういみで、この現実・世界・内⁶に足場をもつのである。

では、アナログアとはどのようなものなのか？山田晶による明快かつ平易な説明がある。

(アナログアは) 神と世界とを、両方の絶対的区別をしながら、それを統一するような論理としてでてくるのです。ですから、神と被造物に共通す「存在」ということがいえる、ということと、同時に絶対的に違うということ、絶対的な「他性」と絶対的な「同一性」の統一が「アナログア」で示される。⁷

例えば、「神は善である」と「ジョンは善 (い人) である」という命題 (文) を考えてみよう。この二つの命題 (文) において、「善」という用語は存在論的に異なった仕方でも用いられているが、神とジョン (人間) が文字通りのいみで「善」であることに変わりはない。「善」という用語は、神とジョン (人間) に対してアナロジカルないみで適用されるのである。⁸ このように、アナログアに依拠することによって、われわれは「見えるもの」 (what is visible) あるいは「知覚できるもの」 (what is sensible) から神のように「見えないもの」 (what is invisible) あるいは「知覚できないもの」 (what is insensible)、⁹「超越的なもの」 (the transcendental being) へと言及する手立てを得るのである。Henri de Lubac が、

[Anagogical vision] leads the mind's consideration *from things visible to those invisible, or from things below to things above, the divine things.*⁹ ...lifts the understanding of the mind through visible things to the invisible.¹⁰

と述べているのは、まさしくこのアナログア — それは神学的言語の基礎文法でもある — を前提としてのことである。アナゴジカル・ヴィジョン

は、このように、なんらかの仮説に依拠することによって成立するものではない。¹¹

2.1 オコナーとアナロギア

1962年6月16日の Alfred Corn に宛てた手紙のなかで、オコナーは「アナロギアによる神についての認識」について言及している。

...I am a Catholic and I believe ... I believe what the Church teaches – that God has given us reason to use and that it can lead us toward a knowledge of him (God), *through analogy*; that he has revealed himself in history and continues to do so through the Church, and that he is present (not just symbolically) in the Eucharist on our altars. To believe all this I don't take any leap into the absurd. I find it reasonable to believe, even though these beliefs are beyond reason. ...Satisfy your demand for reason always but remember that charity is beyond reason and that God can be known through charity.¹²

ここに引用した記述から判断すると、彼女は、トマス・アクィナスの著作¹³をとおして、神学言語の基礎文法としてのアナロギアの一般的役割と意義を理解していたと思われる。

2.2 アナロギアに基礎づけられたアナゴジカル・ヴィジョン

では、アナロギアが、どのようなしかたで、アナゴジカル・ヴィジョンを可能にし、意義あるものとするのか。その論理・言語構造を、先ず「ローマの信徒への手紙」5: 17 以下の記述を例にとりて、確認してみよう。

実にアダムは、来るべき方を前もって表す者だったのです。・・・一人の罪によって、その一人を通して死が支配するようになったとすれば、なおさら、

神の恵みと義の賜物を豊かに受けている人は、一人のイエス・キリストを通して生き、支配するようになるのです。そこで、一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。¹⁴

この箇所は、修辞法的観点からすれば、以下のような対照法 (*antithesis*) を用いて記述されていることが判明する。

- A : 一人の罪によって、その一人を通して死が支配するようになった。
A' : 神の恵みと義の賜物を豊かに受けている人は、一人のイエス・キリストを通して生き、支配するようになる。
B : 一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下された。
B' : 一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになった。
C : 一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされた。
C' : 一人の従順によって多くの人が正しい者とされる。

A と A'、B と B' 並びに C と C' との間の論理・言語構造に着目すると、それらはすべて「アダム」と「来たるべきアダム」(イエス・キリスト)¹⁵ とのアナロジカルな関係の上に構築されていることが分かる。例えば、A と A' においては、「アダムの罪」と「死の支配」に対する「イエス・キリスト」と「神の恵みと義による生の支配」がアナロジカルな関係になっている : A : A' = B : B'。さらに B (アダムの罪に対する有罪判決) と B' (イエス・キリストによる正しい行為に対する義認)、並びに C (アダムの不従順に対する罪人) と C' (イエス・キリストの従順に対する義認) の関係もまたしかりである。

アウグスチヌス (Aurelius Augustinus, 350-430) は、

*Analogia, cum veteris et novi Testamentum congruentia demonstratur.*¹⁶

と述べているが、アキナスの論旨の方がより明確である：

*Analogia vero est, cum veritas unius Scripturae ostenditur veritati alterius non repugnare.*¹⁷

アナゴジカル・ヴィジョンが真理性を帯びるためには、このように、アナログアによる論理・言語的基礎づけを必要とする。そして、そのかぎりにおいて、アナゴジカル・ヴィジョンは可能となり、その意義を有する。

先ほど言及した A と A' との間にあるアナロジカルな論理構造 (A : A' = B : B') に基づいたアナゴジカル・ヴィジョンのなかで見えてくるのは、A' は A で述べられていることについて「靈的に高められた理解」であり、A が本来的に昇華された状態であるということである。B と B' 並びに C と C' の関係においても、同様のことが見いだされる。

次にコリントの信徒への手紙 (1) 15 : 42 以下の記述を分析してみよう。

死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然のからだがあるのですから、霊の体もあるわけです。「最初の人アダムは命ある生き物となった」と書いてありますが、最後のアダムは命を与える霊となったのです。最初に霊の体があったわけではありません。自然の命の体があり、ついで霊の体があるのです。最初の人土ででき、地に属する者であり、第二の人は天に属する者です。・・・わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられるのです。¹⁸

ここにおいても、「朽ちゆくもの」を分子 (A)、「自然の命の体」を分母 (B)、「朽ちないもの」を分子 (C)、「霊の体」を分母 (D) とすれば、この手紙全体の核心には、 $A : B = C : D$ という比例性のアナロジー (*analogia proportionalitatis*) があることが判明する。すなわち、アナゴジカル・ヴィジョンのなかでは、 $C : D$ は $A : B$ が「靈的に高められた理解」とな

り、イエスを「キリスト」と信じる者たちにとっては — 彼らはアナゴジカル・ヴィジョンのなかに立って、すなわち「永遠の相の下に」この世界とそこに佇む人間を見ている — やがて到来する「約束された希望の成就」なのである。

2.3 オコナーの作品創作におけるアナゴジカル・ヴィジョンの援用

オコナーは、*Mystery and Manners: Occasional Prose* (1970) における記述が示しているように、作品（フィクショナル・ストーリー）の創作におけるアナゴジカル・ヴィジョンの必要性¹⁹について論じている。

The kind of vision the fiction writer needs to have, or to develop, in order to increase the meaning of his story is called *anagogical vision*, and that is the kind of vision that is able to see different levels of reality in one image or one situation. The medieval commentators on Scripture found three kinds of meaning in the literal level of the sacred text: one they call allegorical, in which one fact pointed to another; one they called tropological, or moral, which had to do with what should be done; and one they called anagogical, which had to do with the Divine life and our participation in it. Although this was a method applied to biblical exegesis, it was also an attitude toward all of [p. 73] creation, and a way of reading nature which included most possibilities, and I think it is this enlarged view of the human scene that the fiction writer has to cultivate if he is ever going to write stories that have any chance of becoming a permanent part of our literature.²⁰

オコナーがここで用いるアナゴジカル・ヴィジョン (*anagogical vision*) という用語は、カトリックの伝承的な聖書釈義の影響の下にあるとはいえ、その実体は文学作品の創作のために援用されたアナゴジカル・イマジネーション (*anagogical imagination*) にほかならない。もしオコナー自身が宗教的次元におけるアナゴジカル・ヴィジョンを文学の創作に直接的に適用できると考えているとすれば、それは彼女の誤解に基づくものといえよう。「宗教言語」 — この論考のコンテキストでは、キリスト教言語にほかなら

ない — で述べられる人間と神との問題と「文学の言語」で問い質される人間と神の問題が取り扱われる意味論的領域 (semantic domain) が異なるからである。

宗教言語はこの世界に足場をもち、同時に超越を志向する言語である。アキナスが、聖書の字義的・歴史的意味と霊的意味について言及するさい、「言葉によって差し示された物事が、さらに他の物事をも指し示す」(quod ipsae res significatae per voces, etiam significant aliquid.²¹)と言っているのは、まさにこのことなのである。他方、フィクショナル・ストーリーに代表される文学の言語が創作する世界は、本質的にメタフォリカルなしかたで世界・人間の姿を彫琢・言表する。そのさい、文学の言語が醸し出すメタファーの力が、事実よりも強力なものとなって読み手に伝搬されうることについては論を俟たない。

3.0 「文学に援用されたアナゴジカル・ヴィジョン」：アナゴジカル・イマジネーションのなかで、オコナーの作品を読み解く

ここでは、これまでに述べてきたアナゴジカル・ヴィジョンの論理・言語構造を念頭に入れ、オコナー自身が作品世界の創作のために援用したアナゴジカル・ヴィジョン、すなわちアナゴジカル・イマジネーションを通して (2.2 参照)、“The River” (1953) と“The Displaced Person” (1954)²²が「どのように構築されているのか」、そして「それらの作品群が提起するものとはなにか」を探求したい。

3.1 アナゴジカル・イマジネーションのなかで読み解く“The River” (1953)²³の作品世界

酒浸りで退廃的な日々を送っている両親²⁴からからぞんざいに扱われているハリー (Harry Ashfield)。 — このことは、ハリーが栄養失調状態 (malnutrition) にあることを示す “a pale spotted hand”²⁵ という語句や、

彼にこころからの愛情を示すこともなく、きちんとした衣食を与えることのない家庭環境の描写によって裏付けられている。²⁶

彼の母親は、「二日酔い」(a hangover)²⁷という病気を患っている。事の真相が判らないハリーのシッター、ミセス・コニン (Mrs. Connin) は、ハリーの父親に、河で説教しているベヴェル・サマーズ師 (The Reverend Bevel Summers²⁸) に会うように勧める。師は病を「いやす力」をもってしているというのである。²⁹

シッターを依頼されたものの、ミセス・コニンには(衣服さえもきちんと着せてもらっていない) 子供の名前さえ教えられていない。名前を尋ねると、(父親とミセス・コニンとの会話の一部始終を聞いていたハリーがベヴェル・サマーズへの関心があったのだろうということは文脈から推測がつく)「ベヴェル」(Bevel)と答える。³⁰

ハリーがベヴェルと名乗ったことは、この作品のなかで重要なポイントとなる。「ベヴェルと名乗ること」は、ハリーが自らの新生へと向かうこと、その旅立ちの前徴となっているからである。

このことを言語行為の視点に立って分析すれば、「ハリーは『ベヴェル』と名乗ることによって、『自分が待望していたこと』、すなわち今のハリーではなく、違った自分となることを無自覚的なしかたで表明した」と言えよう。³¹ そればかりではない。「ハリーがベヴェルと名乗った」現場から、この作品を構築しているアナゴジカル・イマジネーション — それは以下のようなアナロジーに支えられているがゆえに、作品世界にリアリティをもたらすものとなっている — の全貌が見渡すことができるのである。

A: ハリー (友だちもなく、両親からぞんざいに取り扱われ、無自覚的にはあるが、魂の癒しを求めている子供。)³²

B: ハリーの両親 (彼らの怠惰な生活ぶり、酒浸りの日々にシンボライズされた、人間の惨めな世界)

C: ベヴェル (洗礼を受けることによって、これまでのハリーではなく、価値ある者となる (Cf. “You won’t be the same again,” the preacher said. “You’ll count.”³³))

D: イエス・キリスト (キリストの王国: ベヴェルが惨めな現実から脱出し、向かってゆく世界)

ここでは、A に対する B と C に対する D がアナロジカルな関係になっていることが判明する (A : B = C : D)。これは、ハリーが生きてきた惨めな現実世界 (A : B) がアナゴジカルないみ靈的に高められた状態 (C : D) を表示している。ベヴェルはこの靈的に高められた世界、すなわち「自分が価値ある者とされる世界」、すなわち「新しい自分」の世界へと決然として進んで行くのである。

He left...there was nothing from there he wanted to keep.³⁴という記述は、一切を捨ててイエス・キリストに従って行った使徒たちの勇姿を彷彿させる一方、ベヴェル自身は「物理的なものと不可視なもの、文字通りのものと神秘的なものの区別をつかない子供である」(a child who makes no difference between the physical and the unseen, the literal and the mysterious)。³⁵しかし、今やハリーではなく、ベヴェルとなった彼は、イエス・キリストが求めた「無私の従順さ」(selfless obedience³⁶)をもって、彼が探し求めていた世界へと脱出してゆくのである。「河の中にあるキリストの王国」(the Kingdom of Christ in the river)を見つけ出すまで。河 — それは、イエスの血でできた命の河 (the River of Life, made out of Jesus' Blood.the Rive of Life³⁷) のアレゴリーである — の中を進んでゆくのである。

3.2 アナゴジカル・イマジネーションのなかで読み解く“The Displaced Person” (1954) の作品世界

この作品に登場するグイザック(Mr. Guizac) は、アナゴジカル・イマジネーションのなかで見ると、イエス・キリストのアレゴリーであることは明白である。グイザックは、— イエス・キリストという存在が律法学者やファリサイ派の人々、そして彼らに盲従する人々、さらには当時の政治的支配者たちにとってそうであったように — ショートレイ夫妻 (Mr. and Mrs. Shortley) や黒人たち、そして彼を雇い入れた農園主のミセス・マッキンタイア (Mrs. McIntyre) のような閉鎖的精神土壌に生きる者たちに

とって、厄介な「侵入者」以外の何者でもない。彼らの関係性をアナゴジカル・イマジネーションのなかで見ると、次のようになる。

A：グイザック。ナチスによって祖国を追放されたポーランド人。たどり着いた異郷（南部アメリカ）で、ミセス・マッキンタイアが経営する農園に雇い入れられる。
B：ショートレイ夫妻や黒人たち、そして農園主のミセス・マッキンタイアなどに見られる、狭隘な精神的土壌に生きる者たち。

(1) ショートレイ：グイザックを当初から疎ましく思っている。グイザックが有能な仕事ぶりを示すにつれて、農園での彼の立場は危うくなり、解雇通告寸前に農園から逃げ出すが、妻を失ったあと舞い戻ってくる。とりわけ妻の死は、— “I figure that Pole killed her,”...”She seen through him from the first. She known he come from the devil. She told me so.”³⁸⁾ という彼の言葉がそれを表明しているように—グイザックに対する憎しみを増幅させ、復讐の企てる引き金となる (“Revenge is mine, saith the Lord.”³⁹⁾)。やがてショートレイは、事故を偽装した狡猾な方法で、グイザックを死に追いやる。

(2) ショートレイの妻：グイザックのような「異邦人」に対する排除の精神は、夫のショートレイと同じである。彼女が、幻視のなかで聞いたとされる “Prophecy!”⁴⁰⁾ に始まる、“The children of wicked nations will be butchered. Legs where arms should be, foot to face, ear in the palm of hand. Who will remain whole? Who will remain whole?”⁴¹⁾ という言葉が意味するものは、グイザックに対する「彼女自身の思い」を反映した白昼夢 (daydreaming) にすぎず、キリスト教的ないみにおけるスピリチュアル・ヴィジョンとの本質的關係はない。

(3) 黒人たち：与えられた状況に甘んじ、⁴²⁾ その日を生き抜くことに慣れきっている。それゆえ人の目の色を伺い、力ある者に追従してしまう。

(4) ミセス・マッキンタイア：あらゆることに疑心暗鬼である。それは、彼女が「自己本位」な人間であることを証している。⁴³⁾ 例えば、グイザックが期待していた以上に働く、有能な人物であることがわかると、「あの人は、私の救いなの！」(That man is my salvation!⁴⁴⁾) と言うが、彼がナチスの支配下にある故国ポーランドで苦難のさなかにある従姉妹と農場の黒人と結婚させ、彼女を出国させようと奔走しているのを知ると、その事情には耳を傾けることもなく、「(なんて) 人でなし (なの) ！」(What kind of a monster are you!) と声を荒げ、難詰する。

C：イエス・キリスト

D：律法学者やフェリサイ派の人々、そして彼らに盲従する人々、さらには当時の政治的支配者たち。彼らは共謀してイエスを死に追いやる。

ここでは、「Aに対するB」と「Cに対するD」というアナロジカルな関係(A:B=C:D)が、“The Displaced Person”という作品のフレームワークとなっていることは明らかである。このことに基づいてこそ、グイザックの生と死の意味をアナゴジカル・イマジネーションのなかで見る事が可能となる。つまり、「グイザックの生と死」は「イエス・キリストの生と贖いの死」との関連で描かれており、老神父のフリン(Father Flynn)の“*He came to redeem us.*”⁴⁵という言葉が、⁴⁶ 強制追放者グイザックの存在理由を明らかにしていることが判明するのである。

アナゴジカル・ヴィジョンのなかに立って見ると、グイザックの死は、「人間の罪悪を贖うキリストの死に与る」といういみで、信仰のミステリウム(*mysterium fidei*)のなかにある。この「ミステリウムとしてのグイザックの死」をとおして、ショートレイ、黒人たち、そしてミセス・マッキンタイアが犯した悪の様相、そして彼らの存在状況が浮かび上がってくるのである。オコナーは、そのさい、悪の様相を彫琢するためにさまざまな知覚的表現(視覚や聴覚にかんする動詞・句・名詞)を用い、それらがグイザックの殺害のさいの“*one look that froze them in collusion forever*”という一点に収斂してゆくよう、見事なしかたで作品を構築している。

[Mr. Shortley had got on the large tractor...] He had headed it toward the small tractor but he braked it on a slight incline⁴⁷ and jumped off⁴⁸ ...Mrs. McIntyre was looking fixedly at Mr. Guizac's legs lying flat on the ground now. She heard the brake on the large tractor slip and, looking up, she saw it move forward, calculating its own path. Later she remembered that she had seen the Negro jumped out of the way...and that she had seen Mr. Shortley turn his head with incredible slowness and stare silently over his shoulder and that *she had started to shout to the Displaced Person but that she had not*. She had felt her eyes and Mr. Shortley's eyes and the Negro's eyes come together in one look that froze them in collusion forever, and she had heard the little noise the Pole made as the tractor wheel broke his backbone.⁴⁹

ショートレイの一連の行為は、彼が悪意をもって、意図的に、それも事故を偽装したしかたでグイザックを殺したことを示している。そしてグイザック殺害現場にいた黒人の若者、そしてミス・マッキンタイアであるが、彼らが「見たこと」、「見ていたこと」、「聞いたこと」そして「あえてしなかったこと＝不作為」(omission: a failure to fulfill a moral obligation)は、ただたんに犯された悪がショートレイとの「暗黙の共謀性」(tacit collusion)を宿していることを示すに止まらない。悪は、それを犯した者たちの悲惨さ(misery: very poor human condition)を照らし出すのである。

ミス・マッキンタイアは、事件の後、nervous affliction⁵⁰—すぐに不安になったり、何かに怯えたりして苦しむような精神状態—に苛まれるが、このことが意味するものは、神の前でなされた悪は、それが消極的悪か積極的悪であるかにかかわらず、曖昧にされたままに残ることはなく、その悪を当事者に突き付け、自覚させ、かならずやその責任を問い質すということである。オコナー研究者 Richard Giannone が、

This final section dramatizes the interplay between justice and justification that makes up the whole drama of *The Displaced Person*.⁵¹

と述べているのは、まさしくこのことを了解してのことである。つまり、この作品の結末部は、「神の義とすることとはなにか」、「人間は、いかにして神によって義とされるのか」を問い質しながら閉じているのである。

4.0 アナゴジカル・イマジネーションとオコナーのカトリック・アイデンティティ

オコナーは、1955年11月6日の John Lynch に宛てられた手紙のなかで、

I feel that if I were not a Catholic, I would have no reason to write, no reason to see, no reason ever to feel horrified or even to enjoy anything. I am a born

Catholic, went to Catholic schools in my early years, and have never left or wanted to leave the Church.⁵²

と述べているが、これは彼女が「なぜ書くのか」を明確に表明したマニフェスト (manifesto) とも読める。

オコナーにとって、「作家であること」と「カトリックであること」との間に齟齬はない。それゆえ「あらゆることを大変厳格にローマ・カトリックの視点から見る」⁵³と表明して憚らなかった彼女が、— この論考のなかで焦点を当てた“The River”と“The Displaced Person”のように— 作品世界の構築のさいにアナゴジカル・イマジネーションを駆使したと考えることにも首肯できる。オコナーの作品世界は、彼女が生涯をコミットメントして生きたカトリック信仰との「統合体」(an integrated whole)であり、自身のカトリック・アイデンティティの反映だからである。⁵⁴

¹ この論考は、日本フラナリー・オコナー協会 第 5 回大会 (明治学院大学白金キャンパス・2018 年 3 月 17 日) で報告されたものに加筆・補正をほどこしたものである。なお、この論考のなかでくり返し言及される資料は、以下のように略記されている。

Aquinas S. T. (1980): Aquinas S. T., *Summa Theologiae*, Opera Omnia 2, Stuttgart-Bad Cannstatt: Friedrich Formnn Verlag, 1980.

CCC (1994): *Catechism of the Catholic Church*. London: Geoffery Chapman, 1994.

CS (1990): *The Complete Stories of Flannery O'Connor*. London: Faber and Faber, 1990.

De Lubac H. (2000): De Lubac, H. *Exégèse Médiévale (Medieval Exegesis)*. Trans. E.M. Macierowski, Edinburgh: T & T Clark, 2000.

Giannone R. (1989): Giannone, Richard. *Flannery O'Connor and the Mystery of Love*. Urbana and Chicago: Univ. of Illinois Press, 1989.

HB (1988): *The Habit of Being: Letters of Flannery O'Connor*. Sally Fitzgerald, ed. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1988.

MM (1970): *Mystery and Manners: Occasional Prose*. Sally and Robert Fitzgerald, eds. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1970.

OED (2009^{2nd} on CD-ROM, v. 4.0): *The Oxford English Dictionary*, 2009^{2nd} on CD-ROM, v. 4.0.

上杉訳『秘義と習俗』(1982): 上杉明訳『秘義と習俗』春秋社, 1982 年。

『新共同訳聖書』(2014): 『新共同訳聖書』日本聖書協会, 2014 年。

田中訳(2015): 田中浩司訳『フラナリー・オコナーのジョージア』新評論, 2015 年。

横山訳「強制追放者」(2009): 横山貞子訳「強制追放者」『フラナリー・オコナー全短篇』ちくま文庫, 上巻, 2009 年。

² De Lubac H. (2000) vol. I, 260. Cf. OED (2009^{2nd} on CD-ROM, v. 4.0. 以下、**2.0** と **2.2** の記述部分には、Kameda M. “Love, Being and Time: An Essay on Julian of Norwich.” 福島県立医科大学総合科学教育研究センター紀要 (The Bulletin of the Center for Integrated Sciences and Humanities), 7 (November 2018): 8-24. と重複している箇所が多くある。

³ CCC (1994) 31. De Lubac は歴史的・文献学的研究を踏まえ、次のように述べている。「オリゲネス (c. 185 - c. 254) やニッサのグレゴリウス (c. 330 - c. 395)、そしてヒエロニムス (c. 340 - c. 420) は、すでにアナゴジーが (聖書の) 霊的意味の一つであり、天界にある物事の意味 (より高きものからもたらされる意: *sensus de superioribus*)、やがて到来する天上的な神秘と理解している (*caelestia mysteria ventura*)」(De Lubac H. (2000), vol. II. 185) と。なお、De Lubac は *anagogia* の word analysis を a synonym for *sursumductio* (ἀνα = *sursum*: upward + Gr. γωγή = L. *ductio*: leading) としている (De Lubac H. (2000), vol. I. 260)。これら先行する教会教父たちの研究を踏まえ、トマス・アクイナス (c. 1225-74) が *Summa Theologiae* のなかで言及している聖書の意味論については、亀田政則「アズベリーは病床で何を見たのか：フラナリー・オコナー『長引く悪寒』論攷」。キリスト教文学研究, 29, 2012, 172 以下を参照されたい。

⁴ Cf. “[V]iew[ing] realities and events in terms of their eternal significance” (CCC (1994), 31, modified).

⁵ オコナー自身のアナゴジカル・ヴィジョンに関連する言及は、“Novelist and Believer” (1963) in MM (1970) 159. および *The Catholic Novelist in the Protestant South* (1964) in MM (1970), 203 に見られる。なお、カトリック作家の作品創作と聖書との関係につい

て、オコナーは次のように述べている。“The Catholic writer may be immersed in the Bible himself, but if his readers and his characters are not, he does not have the instrument to plumb meaning – and specifically Christian meaning – that he would have if the biblical background were known to all” (*MM*(1970), 204).

⁶ もちろん、われわれが「現実」と呼び、慣れ親しんで生きている「世界」は、論理的に考えると、いくつかある可能世界 (possible worlds) のひとつにほかならない。この点については、亀田政則『『退任講義録』フィクションと現実：なぜわれわれはフィクションを読むのか』、福島県立医科大学看護学部紀要, 22 (2020): 1-12 を参照されたい。

⁷ 山田晶「アナログアと一義性」『アナログアと神』哲学書房, III-2, 1989, 9. () 内は筆者の挿入語句。

⁸ Aquinas S. T. (1980) I, q. 13. a. 5. Cf. *Summa Theologiae*. Blackfriars, ed. London: Eyre & Spottiswoode and New York: McGraw-Hill, 1964, vol. III.

⁹ De Lubac H. (2000), vol. II. 180 and 401, Note 14.

¹⁰ De Lubac H. (2000), vol. II. 180 and 402, Note 17, cf. vol. I, 236 and 432, Note 49.

¹¹ Cf. De Lubac, H: “It is always within the real world, within a world whose supernatural finality is not hypothetical but fact, and not by following any supposition that takes us out of the world, that we must seek an explanation of the supernatural” (*The Mystery of the Supernatural*, tr. by Rosemary Sheed, New York: Herder and Herder, 1967. 80).

¹² *HB*(1988) 479-80.

¹³ 「知人宛ての手紙」からも判明するように、オコナーはトマス・アクィナスの英訳版 *Summa Theologiae* (1914 年の初版と 1920 年の改訂版はロンドンで、1947 年にはアメリカでも出版された) を読み (To “A”, 2 August, 1955; 14 December, 1957)、*De Veritate* などにも関心を示している (To “A”, 25 December, 1959; To Maryat Lee, 13 January 1960)。

¹⁴ 『新共同訳聖書』(2014)

¹⁵ 記述にある「アダム」は「すべての人間の全体集合」になっている：(U (Adam) = {human¹, human², human³, humanⁿ})。

¹⁶ De Lubac H. (2000), vol. I., 126, 358: note 20: アナログアとはすなわち、旧約聖書と新約聖書とに一致が示される場合である。

¹⁷ Aquinas S. T. (1980), I, q, 1, a. 10, ad 2, sol: アナログアを (聖書の釈義に) 援用できるのは、ある聖書箇所が示している真理が他の聖書箇所にある真理と矛盾しないときである。

¹⁸ 『新共同訳聖書』(2014)

¹⁹ Candler, Jr. P. M. “The Anagogical Imagination of Flannery O’Connor,” *Christianity and Literature*. 60-1 (Autumn 2010): 11-33. は、オコナー作品とアナゴジカル・イマジネーションについて着目した数少ない論文の一つではある。しかしながら、「アナロジーがいかんにしてアナゴジカル・イマジネーションを可能かつ意味あるものとするのか」、「アナゴジの論理・言語構造はどのようなものなのか」については明確性を欠いている。とはいえ、広いいみでのアナゴジカルな視点からのオコナー作品 (“A View of Woods” (1957), “Wise Blood” (1952), “The Displaced Person” (1954), “Revelation” (1964)) の読み解きは示唆に富む。

²⁰ Cf. *MM* (1970), 72-3. 上杉訳『秘義と習俗』(1982)では、「アナゴジカルな意味」をすべて「神秘的意味」と訳出しているが(同 70)、曖昧である。カトリックの聖書解釈や神学において、「アナゴジカルな意味」には「明確な意味と役割」がある。

²¹ Aquinas *S. T.* (1952^{2nd}), I, q. 1, a. 10, resp.

²² 田中訳 (2015) 176. サラ・ゴードンによれば、この二つの作品は、“A View of the Woods” (1957), “Revelation” (1964), “Parker’s Back”(1965)と並んで、「神の臨在をおそらくもっとも強烈に示している」という。

²³ *CS* (1990), 157-174.

²⁴ “She [Harry’s mother] has a hangover” (*CS* (1990), 158: 7-9). “He [Harry] decided they [Harry’s parents] would be out cold” (*CS* (1990), 168: 27-8); 169:6-8.

²⁵ *CS* (1990), 159: 4. Cf. “[H]e was not a fat boy” (*CS* (1990), 172:5).

²⁶ Mrs. Connin の言う “He ain’t fixed right”. という言葉に対する父親の言葉、“Well then for Christ’s sake fix him”. に注目(*CS* (1990), 157: 6-7). 関連箇所は 158: 35; 169:10; 171: 9-172: 5, etc.

²⁷ *CS* (1990), 168: 28.

²⁸ 「河で説教している」というくだりから、サマーズが「南部バプティスト派の人間」であり、かつ神学的には「ファンダメンタリスト」であることが読み取れる。

²⁹ *CS* (1990), 158: 11-12; 159: 18-19.

³⁰ *CS* (1990), 159: 13.

³¹ いったい自分が何を探し求めているのかが明らかになるのは、洗礼を受け、「バヴェル」として、日中から飲んだくれ寝ている両親のいるアパートに帰ってからのことである (*CS* (1990), (*ibid.*, 172: 21-23).

³² Cf. “Will he heal me?” Bevel asked” (*CS* (1990), 159: 28-29).

³³ *CS* (1990), 168: 5-10, 16-19

³⁴ *CS* (1990), 172: 21-23.

³⁵ Giannone R. (1989) 73. 『新共同訳聖書』(2014)「マタイによる福音書」18:3 参照。Cf. *CS* (1990), 173: 25-26. バプテイスト派と思われるサマーズ師は「河」を「サクラメンタルな意味」で言っている。しかしベヴェルはそれを「文字通りの意味」で受け容れ、河

の深みへと歩き出して行き、命を失うことになるのである(Giannone R. (1989), 72-3)。

³⁶ この言葉は、Giannone R. (1989), 75. からの借用である。

³⁷ *CS* (1990), 165: 14-17, 22.

³⁸ *CS* (1990), 227: 13-15.

³⁹ *CS* (1990), 233:18.

⁴⁰ *CS* (1990), 210: 21.

⁴¹ *CS* (1990), 210: 25-28.

⁴² *CS* (1990), 232: 38.

⁴³ Cf. “Doubts do qualify her selfishness” (Richard Giannone (1989), p. 108: 13-14. Giannone の指摘に従えば、ミセス・マッキンタイアの “People are selfish” (*CS* (1990), 226: 35) という言葉は、自身の存在状況を反照するものと言えよう。

⁴⁴ *CS* (1990), 203: 22-23.

⁴⁵ *CS* (1990), 226: 28. フリン神父の言った “Christ will come like that!” (*CS* (1990), 226: 12) や “The Transfiguration!” (*CS* (1990), 226: 21) の意義と役割については、この論考では、言及する余裕がない。この言葉についての「チャレンジングな解釈」は、Richard Giannone (1989), 108: 34ff. に見られる。なお、グイザックを解雇しようとしているミセス・マッキンタイアが、フリン神父に向かって、“Christ was just another D.P.” (*CS* (1990), 239: 22) と言う言葉は、彼女自身の意図とは逆に、「そもそも、グイザックとは誰なのか」を明らかにする役割を果たしている。

⁴⁶ Cf. Giannone R. (1989), 108: 25-26.

⁴⁷ 横山訳「強制追放者」(2009)には数々の疑問がある。この箇所では、横山は “She heard the brake on the large tractor slip”. から推測して、前置詞句の “on a slight incline” を「ブレーキをちょっとずらして軽くかけると」(同 322)と訳出しているように思われるが、適切ではない。横山訳を踏襲すれば、その英語表現は “lightly brake the tractor to a stop” あるいは “lightly put the brakes on the tractor” 等になるであろう。“on a slight incline” は “on a gently sloping hill” と同義語であり、「緩やかな斜面／勾配になっているところ」などと解するのが妥当である。物語の背景にはオコナーの母親が経営していたアングルシア農場があったと思われるが、当時、農場で使用されていたトラクターは Allis-Chalmers WD (1953 年製) であり、そのブレーキ・システムは “foot-operated brakes” (Terry Dean, *Allis-Chalmers Farm Tractors and Crawlers: Data Book, 1914-1963*, Motorbooks, 2000, 63) であった。推測するに、ショートレイは foot-operated brakes を踏んでからエンジンを切ったが、エンジン・ギアはニュートラルにし、ブレーキがしだいに上がってきてしまうような状態にしておいた (これが結果的に「ブレーキが外れる音」と

して聞こえる)と思われる。やがて大型トラクターにはその重量も加わって斜面を勢いよく走り出すことになる。それゆえ、グイザックは大型トラックに気づく間もなかった、と考えるのが妥当であろう。この場面を試訳すれば、以下のようになろう：「ショートレイは大型トラクターに乗り、・・・小型トラクターの方に向けて進ませ、[緩やかな勾配になっているところで] ブレーキをかけ、飛び降りた。・・・ミセス・マッキンタイアは、[そのとき] 地べたに [横たわっている] グイザックの両足をじっと見ていた。大型トラクターのブレーキが外れる音が聞こえ、[目を上げると]、[その進路を押し量るかのよう]に] 小型トラクターの方へ直進してくるのが見えた。[後になって、] 彼女は黒人の若者が声もなく、さっと飛び退いた [のを見ていたことを思い出した]。・・・背を向けたショートレイが信じられないほどゆっくりと首をまわし、無言のまま、肩越しに見つめていた。彼女自身は大声を上げて強制追放者に危険を知らせようとしたが、そうはしなかった。彼女は、自分の目、ショートレイの目、そして黒人の目が、[彼らを永遠に共謀関係のなかに凍結させる一つの視線へと化したことに気づいた。]そして、トラクターの車輪がポーランド人の背骨を砕いたときに立てた、[にぶい] 音が聞こえた。」

48 ショートレイが「飛び降りた」(jumped off)のは、あきらかに、ゆっくりとトラクターから降りてはならない理由があったからである。彼は「トラクターがすぐさま斜面を走り出すこと」を分かっていたのである。

49 *CS*(1990), 234: 14-29.

50 横山訳「強制追放者」(2009) 324 では、「神経を病む」となっている。

51 Giannone R. (1989), 108: 10-11: 「この結末部は、「強制追放者」全体のドラマを作り上げている「神の義」と「(神による) 義認」との相互作用を劇的に表現している。」21世紀の世界状況というコンテクストで *The Displaced Person* を読めば、グイザックの生と死は祖国を追われた難民 (refugee) の生と死がもたらす allusion (a symbolic reference: a metaphor, parable, and allegory) と見るのは間違いではないが、オコナーの意図はそれに尽きるものではない。この作品には、「神の義はかならずや為される」という強いメッセージがある。

52 *HB*(1988), 114.

53 田中浩司訳『フラナリー・オコナーとの和やかな日々』新評論、2014, 47。他に 7, 189, 218 を参照。オコナーは、「小説家としての私の役割の大部分は、究極的な関心事をもふくめて、[あらゆるもの・ことをできるかぎり表面的ではなく、具体的に、かつ明確にする] ことである」とも述べている (*MM*(1970), 155. 上杉訳『秘義と習俗』(1982), 145 参照)。

謝辞

注 50 で言及したトラクターとブレーキ・システムについては、中央大学の久保尚美准教授に多くを教えられました。また、防衛大学の田中浩司教授には、最終校に至るまでの間、数々のコメントとアドバイスをいただきました。ここに感謝の意を表します。

【会則】

平成 25 年 3 月 25 日制定

平成 25 年 3 月 25 日施行

平成 30 年 3 月 17 日改正

- 第 1 条 本会は日本フラナリー・オコナー協会 (The Flannery O'Connor Society of Japan) と称し、略称を FOSJ とする。事務局を附則のとおり置く。
- 第 2 条 本会はフラナリー・オコナーを中心として、関連ある作家や文学の流れについて研究を行うことを目的とする。
- 第 3 条 本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。
1. 年次大会の開催
 2. 機関誌等の発行
 3. アメリカの The Flannery O'Connor Society その他内外の関係学会との連携
 4. その他必要と認められる事業
- 第 4 条 本会の会員は第 2 条の趣旨に賛同し、所定の会費を納入するものとする。
2. 会員は、普通会員・賛助会員・学生会員の三種類とする。
 3. 会費は年額とし、次の区分による。
普通会員 ¥4,000 学生会員 (博士課程まで) ¥1,000
賛助会員 ¥10,000 以上
- 第 5 条 本会に次の機関を置く。
- 総会 役員会
2. 総会は本会の最高議決機関であり、毎年 1 回会長が招集する。
 3. 役員会は役員をもって構成し、本会の運営にあたる。
役員会は必要に応じ各種の小委員会を設けることができる。
- 第 6 条 本会に次の役員を置く。役員の任期は 3 年とし再任を妨げない。
- 会長 1 名 副会長 1 名 事務局長 1 名 幹事 若干名 監査 2 名
2. 役員は総会において会員が互選する。
 3. 役員の役職は、総会において役員が互選する。
 4. 会長は本会を代表して会務を統括し、副会長は会長を補佐する。
 5. 幹事は事務局長の職務を補佐し、会務を執行する。

6. 監査は本会の財務および会務執行状況を監査する。
- 第 7 条 本会に顧問を置くことができる。顧問は役員会の推挙により、会長が委嘱し、会長及び役員会の諮問に答える。
- 第 8 条 本会の経費は会費及び寄付金により支弁する。
本会の会計年度は毎年 1 月 1 日から翌年 12 月 31 日までとする。
- 第 9 条 本会則の改正は総会の承認を経なければならない。但し、付則の事務局に関する箇所については、事後承認とすることができる。また改正年月日の記入も省略することができる。
- 附則 1. 本会の準備委員会を平成 24 年 8 月 3 日、日本大学理工学部にて発足する。
- 附則 2. 本会の事務局を平成 25 年 3 月 25 日より、千葉県船橋市習志野台 7-24-1 日本大学理工学部一般教育教室英語系列 中村文紀研究室に置く。
- 附則 3. 会則は平成 25 年 3 月 25 日から施行する。
- 附則 4. 本会の事務局を平成 28 年 3 月 26 日より、暫定的に神奈川県横須賀市走水 1-10-20 防衛大学校総合教育学群外国語教育室 田中浩司研究室に置く。
- 附則 5. 本会の事務局を平成 29 年 3 月 25 日より、東京都八王子市東中野 742-1 中央大学文学部英語文学文化専攻 久保尚美研究室に置く。
- 附則 6. 平成 30 年 3 月 17 日の総会にて本規約の第 4 条の 3 及び第 8 条の改訂、第 4 条の 4 の削除、会誌「投稿規定」の規定 1 及び 3 の変更、「執筆要項」5 の削除が承認された。

【投稿・執筆規定】

◆投稿規定◆

1. 本誌は、フラナリー・オコナー協会の学会誌であり、原則として年に 1 回オンライン・ジャーナルとして発行する。
2. 投稿原稿は、フラナリー・オコナーに関連する論文とし、未発表のものに限る。但し、学会で口頭発表したものについては、その限りではない。その旨を注に明記すること。
3. 応募〆切 毎年 7 月末日
4. 原稿送付方法 原稿をワードの添付書類としてメールで編集責任者に送ること。その際、略歴（所属学校・機関、身分）をメールの本文に記入すること。
5. 原稿採択方法 査読委員による査読を経て決定する。
6. 校正 校正は 2 校までとする。初校は 1 週間以内、再校は 3 日以内に返送すること。
7. 上記以外の案件については、協会役員会における判断が優先される。

◆執筆要項◆

1. 字数 和文論文は 12,000 字程度、英文論文は 7,000 語程度を目安とする。
2. 書式 和文は MS 明朝、英文は Century とし、いずれもフォントは 12 ポイントで横書きとする。
3. 本文の注記
 - a) アラビア数字を用い、文末脚注（後注）とする。
 - b) 外国の人名・地名・書名は、初出の箇所日本語の後ろの（ ）内に併記する。
4. 書式の詳細については、『MLA 新英語論文の手引き』（北星堂）、*MLA Handbook for Writers of Research Papers* の最新版を参照のこと。

【活動報告】

◆第3回大会◆

日時：平成28年3月26日（土）14:30～17:10

場所：日本大学理工学部駿河台校舎5号館2階524会議室

I 開会の言葉・会長挨拶（14:30～14:40）

日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏（首都大学東京
名誉教授）

司会：田中浩司氏（防衛大学校 教授）

II 研究発表（14:45～15:30）

『カトリック作家』フラナリー・オコナーの宗教観の特殊性—
『賢い血』を中心に—

発表者：関根金太郎氏（神奈川県立藤沢清流高等学校 教諭）

司会：田中浩司氏

III 講演（15:40～16:30）

演題：「フラナリー・オコナーのための翻訳の日々」

講師：田中浩司氏

司会：野口 肇氏

IV 総会（16:30～17:00）

司会兼報告：田中浩司氏

会計報告

役員改選

新会長挨拶

次号学会誌原稿募集

その他

V 閉会の言葉（17:00～17:10）

野口 肇氏

【報告】

中村文紀氏（日本大学准教授）の事務局長辞任に伴い、当面の間、田中浩司副会長が事務局長を兼務することになりました。

◆第4回大会◆

日時：平成29年3月25日（土）15:30～17:10

場所：明治学院大学白金キャンパス 本館8階81会議室

I 開会の言葉・会長挨拶（15:30～15:40）

日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏（首都大学東京
名誉教授）

司会：田中浩司氏（防衛大学校 教授）

II 総会（15:45～16:00）

司会：田中浩司氏

会計報告：野口 肇氏

役員改選、他：田中浩司氏

III 研究発表（16:00～17:00）

「フラナリー・オコナーの作品における “emptiness” - “A
Temple of the Holy Ghost” を中心に」

発表者：久保尚美氏（中央大学文学部 准教授）

司会：渡辺佳余子氏（東京成徳短期大学 元教授）

IV 閉会の言葉（17:00～17:10）

田中浩司氏

【報告】

田中浩司副会長が兼務していた事務局長に、新しく久保尚美氏（中央大学 准教授）が就任しました。

◆第5回大会◆

日時：平成30年3月17日（土）15:00～18:00

場所：明治学院大学白金キャンパス 本館8階81会議室

I 開会の言葉・会長挨拶 (15:00～15:10)

日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏 (首都大学東京
名誉教授)

司会：久保尚美氏 (中央大学 准教授)

II 研究報告 (15:15～16:45)

「オコナーの作品構築にみるカトリック・アイデンティティ」

発表者：亀田政則氏 (福島県立医科大学 教授)

司会：久保尚美氏

III 総会 (16:50～17:10)

司会：田中浩司氏 (防衛大学校 教授)

会計報告：野口 肇氏

会則改訂、その他：久保尚美氏

IV 閉会の言葉 (17:10～17:15)

田中浩司氏

【報告】

・3月17日の総会において、次の(1)から(3)のような会則の改定が認められました。(1)第4条3、会費の年額について、普通会员の会費を5千円から4千円に、学生会員の会費を4千円から千円に改訂。(2)第4条4、会費の納入が3年間滞った場合は、その年度末をもって自動的に退会となる、という規定を、再検討課題とするため削除。(3)第8条、本会の会計年度を、毎年4月1日から翌年3月31日までとしていたものを、毎年1月1日から12月31日までに改訂。

・同じく総会において、次の(1)から(2)のような会誌の「投稿規定」の改訂が認められました。(1)規定1について、会誌の発行の形態にかんして、オンライン・ジャーナルとして発行する旨を明記する。(2)規定3について、応募の〆切を毎年5月末日から7月末日に改訂。また原稿提出〆切を毎年10月末日とする旨を明記する。

・同じく総会において、会誌の「執筆要項」の改訂が次のように認められました。執筆者負担金にかんする要項5を削除する。

◆第6回大会◆

日時：平成31年3月16日（土）15:00～18:00

場所：明治学院大学白金キャンパス 本館8階81会議室

I 開会の言葉・会長挨拶（15:00～15:10）

日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏（首都大学東京
名誉教授）

司会：久保尚美氏（中央大学 准教授）

II 研究報告（15:15～16:15）

「フラナリー・オコナーの作品における「南部白人」の構築性—
“manners”の一側面として」

発表者：久保尚美氏

司会：田中浩司氏（防衛大学校 教授）

III 総会（16:20～16:50）

司会：田中浩司氏

会計報告：野口 肇氏

事務局より：久保尚美氏

IV 閉会の言葉（17:00～17:10）

田中浩司氏

◆夏の読書会◆

日時：平成31年8月3日（土）14:30～17:30

場所：中央大学多摩キャンパス3号館3205教室

対象作品：Flannery O’Connor, “The Displaced Person”

司会・発議：田中浩司氏（防衛大学校 教授）

I “The Displaced Person”（PBS 1977）鑑賞

II “The Displaced Person” 読書会

（久保）

【編集後記】

この度は、新型コロナの蔓延という世界的な時代の転換点での発行となりました。旧約聖書には疫病に関する多数の記述があります。サムエル記、列王記、歴代誌、ヨブ記、詩編、エレミヤ書、エゼキエル書、アモス書、ハバクク書と枚挙に暇がありません。そこに共通して書いてあることは、疫病は神から人間に対して送られてくる警告・天罰であるということです。中世の教会は、黒死病の阻止に何の働きもなせなかったことから、その権威を失墜したと言われていました。そのような観点からすると、神が神の教会を潰したと見ることができます。つまり神が自分自身を潰したというわけです。人間は神の創造物であるという聖書の観点から見ても、人に疫病を送るということは、神は自身の創造物を破壊していることになるわけですから、神は自己否定していることとなります。神は自己否定を本質の一部としていると言ってもいいかもしれません。詩編に「神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。」(51:17)とあるのも、自己否定の中に生きる神ならではの。

自己肯定・自己実現が時代の趨勢になっている時代に生きる人々にとって、自己否定を求めるような神は存在していたとしても受け入れたくない存在でしょう。ある意味、神は自らの創造物である人間にその存在を否定され、受け入れを拒否されて、存在を全うしたと言えます。

そういえば内村鑑三の言葉に次のような言葉があります。

世がなんじの偉大なるを認めず、かえってなんじを不用物またはそれ以下の者とみなすほどに偉大なれよ。偉大なること、太陽のごとくなれよ。太陽はただ照るのみにて声を立てず、その存在はただ照らざる時のみ認められる。…さらにまた神御自身のごとくに偉大なれよ。彼は人類にほとんど全く忘れられたまえり。その存在は今やデカルトまたはカントのごとき哲学者によって辛うじて証明されるほどまでに忘れられたまえり。(『統一日一生』p. 84)

自分の受けた病をも神からの恩寵として受け入れていたフラナリー・オコナーがこの時代に生きていたら何と言うか、あるいはどんな小説を書くか、そんなことを想像してみるのも一興です。

(田中)

【執筆者紹介】

亀田政則 福島県立医科大学 名誉教授

『フラナリー・オコナー研究』 第2号

The Journal of Flannery O'Connor

ISSN 2188-9716

2020年9月30日発行

発行者 日本フラナリー・オコナー協会

[事務局] 〒192-0393 東京都八王子市東中野 742-1
中央大学 文学部 英語文学文化専攻 久保研究室内

